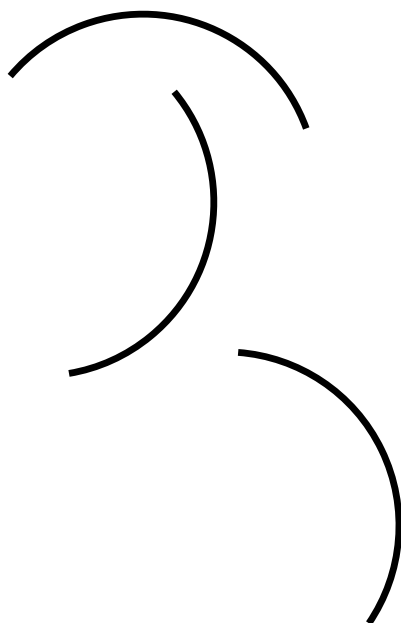


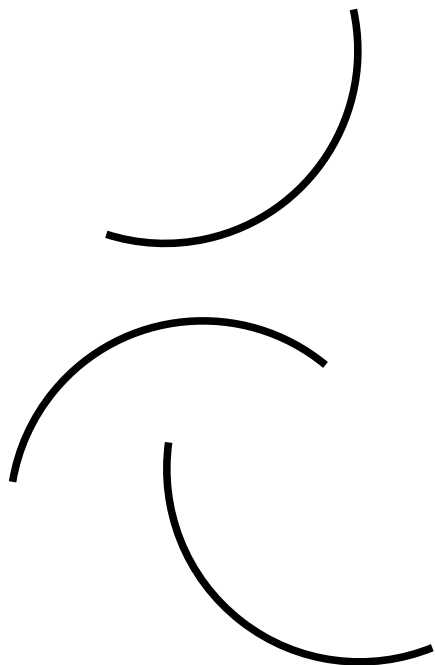
イタリア現代美術展
ファルネジーナ コレクション

境界を
越える
フーティ
フーティ
フーティ
フーティ
人間と自然の対話



2026年9月12日(土)～10月22日(木)
イタリア文化会館

カルラ・アッカルディ
レティツィア・バッターリア
エレナ・ベッラントーニ
トマーゾ・ビンガ
シルヴィア・カンポレージ
ジェア・カゾラーロ
マルティーナ・デッラ・ヴァッレ
イジーニオ・デ・ルーカ
ロレダーナ・ディ・リッロ
レ・ディ・マルティーノ
パオラ・ガンドルフィ
シルヴィア・ジャンブローネ
マリア・ライ
ケッティ・ラ・ロッカ
エレナ・マッツィ
マリオ・メルツ
エリーザ・モンテッソーリ
マリアグラツィア・ポントルノ
ラウラ・プーニョ
アニエーゼ・プルガトーリオ
マルタ・ロベルティ
マリネッラ・セナトーレ



Ministero degli Affari Esteri
e della Cooperazione Internazionale

Collezione
FARNESINA



Ambasciata d'Italia
Tokyo



境界を越えるアイデンティティ

ベネデッタ・カルピ・デ・レズミーニ

ファルネジーナコレクション25周年を記念し、イタリア共和国外務・国際協力省が推進する展覧会「境界を越えるアイデンティティ」は、環境危機、移民、地政学的不安、そして深刻な文化変容を特徴とする現代において、アイデンティティという概念を多角的に考察するものです。

各国のイタリア文化会館との協力のもと、三つの会場を巡回する企画として始まった本プロジェクトは、取り上げるテーマの力強さと今日性によって、当初想定されていた境界を越えて展開してきました。本展「境界を越えるアイデンティティ」は、ヨーロッパ各地を巡回した後、このたび東京のイタリア文化会館において、初めて東洋で開催されることとなります。この新たな一章が示すのは、単なる地理的な拡張を超えた、概念としての進化です。日本との対話は、本展を読み解くための新たな視座をもたらし、イタリア人女性アーティストたちが日本の文化、思想、美学と築き上げてきた関係を浮かび上がらせま​​す。こうした文脈の中で、本展は新たなつながりを獲得し、「境界」という概念は、地理的な限界を意味するものから、出会い、越境し、相互に影響を及ぼし合う場へと変容していきます。

イタリアと日本の対話は、思いがけない両者の親和性を明らかにします。有機体としての自然へのまなざし、空と沈黙の価値、創作活動のプロセス、さらには書かれたものとイメージ、身振りと言語、傷つきやすさと永続性の関係などです。こうして、アイデンティティの形成過程は開かれ、他者との出会いのなかで絶えず定義直されていきます。本展の導入となるのは、マリオ・メルツによる有名なフィボナッチ数列です。これは、つながりと枝分かれを通じて拡張していく、有機的かつ非階層的な認識のメタファーとなっています。この核を中心に、本展は「抵抗の根」「離脱の地理学」「不安定な生態系」の三つのテーマで構成され、現代を取り巻く緊張を多様な観点から見つめます。

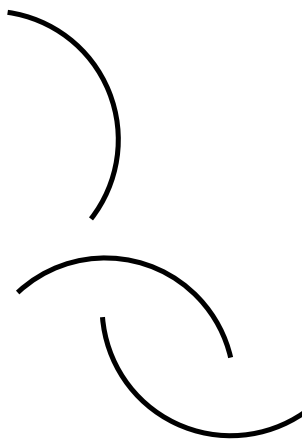
「抵抗の根」では、身体と言語が解放の手段となります。レティツィア・バッテリーア、トマーゾ・ビンガ、カルラ・アッカルディ、ケッティ・ラ・ロッカ、マリア・ライ、パオラ・ガンドルフィ、エリーザ・モンテッソーリなど、イタリア人女性アヴァンギャルドの中心的人物たちの作品は、エレナ・ベッラントーニ、シルヴィア・ジャンブローネ、マリネッラ・セナトーレ、ロレダーナ・ディ・リッロの作品と対話し、批判的な系譜の網の目を生み出します。そこで、既成の秩序の転覆が、生きた実践として、そして不服従の新しい基礎を書き直す行為として立ち現れるのです。

「離脱の地理学」では、ジェア・カゾラーロ、アニエーゼ・ブルガトーリオの作品が、現代の社会や環境の断絶を考えるよう促します。一方、レ・ディ・マルティーノ、マルタ・ロベルティの作品が提示する人間と非人間の境界で宙づりにされた人間の身体は、絶え間なく変容するアイデンティティのメタファーとなっています。

「不安定な生態系」では、風景が単なる背景ではなく、絶えず変容し続ける、傷つきやすい有機体として現れます。シルヴィア・カンボレージ、マルティーナ・デッラ・ヴァッレ、エレナ・マッツィ、マリアグラツィア・ポントルノ、ラウラ・プーニョによる写真作品は、イジーニオ・デ・ルーカの作品とともに、自然を危機の場であると同時に再生の可能性を宿す場として示し、人間と環境の関係を改めて考えるよう導きます。

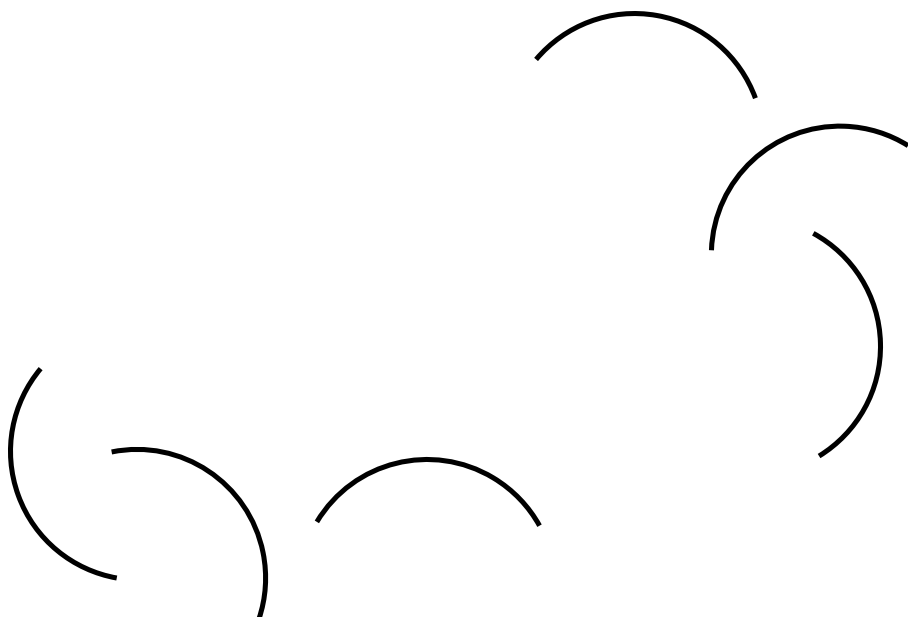
東京での開催にあたり、本プロジェクトは新たな構成を採用し、イタリア人女性アーティストたちの創作活動と日本文化のあいだに生まれる多層的な共鳴を際立たせています。マリア・ライとエリーザ・モンテッソーリの作品は、東洋的な美学と響き合いながら、トマーズ・ビンガの詩と対話します。これらの詩は、作品自身を持つ本質性に加え、日本の俳句との形式的な近さによって選ばれたものであり、簡潔で暗示に富む言葉のうちに、イメージと思考を凝縮する力を備えています。同時に、極東の視覚表現の伝統にインスピレーションを受けたマルタ・ロベルティの作品や、瞑想と記憶の場所としての忘れ去られた風景をテーマとするシルヴィア・カンポレージの作品は、日伊両国の文化による関わりを深めようとするものです。ここから浮かび上がるのが、直接的な影響関係によってではなく、時間や身振り、そして人間と自然の関係に対する共通の感受性から生まれる、親和性の物語なのです。

こうした言語と文化の伝統が交差するなかで、展覧会「境界を越えるアイデンティティ」は、日本での開催において新たな解釈の可能性を見出します。それは、現代におけるアイデンティティをめぐる考察であるだけでなく、東洋と西洋が対話する場でもあります。芸術はそこで、深いつながりを可視化し、差異を超えて、あらゆる境界を越える新たな帰属のかたちを想像するのです。



抵抗の根

本セクションの展示作品は、自律や変化の手段としての身体や言語活動を批判的に考察する(トマーズ・ビンガ、エレナ・ベッラントーニ)。いくつかの作品は、文化的な抑圧にたいする抵抗の形式、再生の象徴、あるいは他者と繋がりあうための手段として現れている(カルラ・アッカルディ)。エリーザ・モンテッソーリのように、自然のシンボルやメタファーを通じて、女性のアイデンティティの奪還というテーマを探究するアーティストもいる。本セクションで展示される作品は、人間と地球の関係の変容というテーマに取り組み、支配という観点から、いかにその関係が変化してきたかを強調する。その一例が、フィボナッチ数列を用いるマリオ・メルツの考察である。女性アーティストたちは、権力の力学を告発し(ロレダーナ・ディ・リッロ)、集団参加を解放の形式として回復し(マリネッラ・セナトーレ)、いかにして支配的な文化が人間と日常生活のあいだにある均衡を歪めてきたかを鑑賞者に問いかけている(レティツィア・バッターリア、マリア・ライ、シルヴィア・ジャンブローネ、ケッティ・ラ・ロッカ)。家父長的な文化と自然との対話はこうして芸術による考察の核となり、支配とアイデンティティと母なる大地のあいだにある関係の複雑さを照らしだす。また別の観点から、絶えざる変化のなかで身体が、記憶やアイデンティティのアーカイブとなる内面の地理学を描きだす作品もある(パオラ・ガンドルフィ)。(ES)



離脱の地理学

本セクションは、人間と自然との根源的な繋がりを問うことで、現在進行しているグローバル化が、個人的な、また集団的なアイデンティティの概念を、いかに再定義しているか考えさせてくれる。展示された作品は、自然界からの分離感がますます大きくなっていることを物語っている。それは生態系にかかわると同時に人間の内面にもかかわる危機を助長する離脱であり、アーティストのなかには未来を見すえてこれに向き合っている者もいる。絶えず変化してゆく状況のなかで、彼女たちは進化しつづけるアイデンティティを解釈し、惑星全体の結びつきがいかに帰属の意味を変え、それが私たちと地球との関係、さらには自己の知覚そのものを変化させているのかについて、意義ぶかい解釈を提供してくれる(ジェア・カゾラーロ)。彼女たちの作品はルーツと文化の変容とのあいだで宙吊りにされたアイデンティティを情動的に示す見取り図を描きだし、近代と環境と個人のあいだにある緊張関係を明らかにする(アニーゼ・プルガトーリオ)。いくつかの作品(レ・ディ・マルティーノ、マルタ・ロベルティ)は、人間と非人間のあいだで宙吊りにされた身体もしくは自動人形を示している。それは、流動的なアイデンティティのメタファーとなり、物理的かつ象徴的な境界を通りぬけて、私たちが誰であり、どこに属しているのかという意味を絶えず再定義するようなハイブリッドの形象である。(ES)

不安定な生態系

本セクションの作品群は、現在進行している環境の危機や社会の危機について考察したものであり、気候変動(ラウラ・プーニョ)や天然資源の搾取、システムに内在する不平等といった主題に取り組んでいる。芸術は、気づきを促し、告発を担う手段であり、生態系の破壊(エレナ・マッツィ)と社会の不正との深い関係を明らかにする。作家たちは、地政学的で文化的な争いの成り行きについてもまた研究しており(マルティーナ・デッラ・ヴァッレ)、地球やその住民たちに及ぼしているグローバル化の影響について、また、それだけでなく、回復や変容、再生の可能性について多面的な視座を提示している。まさしくこの視座において、いくつかの作品(シルヴィア・カンポレージ、マリアグラツィア・ポントルノ)は、場所や風景に新たなアイデンティティを与えている。そこでは、境界を絶えず再定義する様々な力が作用しており、空白は、風景と記憶の変容、再生、そして再興の契機をはらむ豊かで動的な空間へと変貌するのである。(TT)

カルラ・アッカルディ

カルラ・アッカルディ(1924-2014)は、20世紀を代表する芸術家のひとりとして、イタリアならびに国際的なアートシーンで確かな存在感を示した。アンフォルメル的な抽象の潮流のなかで、アッカルディは1947年に設立された芸術集団「フォルマ1」の創設に加わり、ジュリオ・トウルカート、ピエロ・ドラツィオ、ピエトロ・コンサグラと並んで活動した。彼女の芸術言語は、記号、色彩、抽象的形態を独自の方法で用いることに加え、それが素材をめぐる飽くなき実践や視覚分野での革新的な探究と結びついている点において、他と一線を画している。アッカルディは女性解放へ向けた取り組みを行ったが、これもその画業において欠かすことのできない側面である。それは、彼女の絵画が、力強く自律したメッセージを表明する女性たちの発信力を打ち出しているからであり、男性中心の芸術的伝統が押し付けてきた役割や規範を打ち破っている。《接触への応答》において、アッカルディは記号、形態、色彩を用いて、コミュニケーションの手段となり意味形成を担う視覚言語を模索している。記号的かつ抽象的な独自の文字表現を通じて、アッカルディは、文化的、地理的、時間的な隔たりを越える普遍的で非言語的な言語のあり方を探究する。かくして作品は媒介の場となり、そこではアイデンティティが固定された帰属としてではなく、他者との絶え間ない対話のなかで形成される開かれた実践として理解される。(MS)



《接触への応答》2005年

ビニル絵具／画布

120×160 cm

Foto © Giorgio Benni

協力:アッカルディ・サンフィリッポ・アーカイブ(ローマ)
ファルネジーナコレクション



レティツィア・バッターリア

《アルベルゲリア地区、パンをもつ少女、パレルモ》1979年

ジクレエ・ファインアートプリント

70×50 cm

撮影:レティツィア・バッターリア

©Archivio Letizia Battaglia

ファルネジーナコレクション

レティツィア・バッターリア

レティツィア・バッターリア(1935-2022)は、イタリアにおける最初のフォトジャーナリストの一人であり、自らの土地であるシチリアをたえず証言しつづけた写真家である。彼女の仕事は、マフィアによる暴力を単に記録することにとどまらない。その写真には、普通の人々の生、矛盾、尊厳が浮かび上がる。とりわけ女性や少女たちの姿は、共感に満ち、裁きを下さない眼差しによって捉えられている。《アルベルゲリア地区、パンをもつ少女、パレルモ》において、バッターリアは日常の一断片を捉えながら、それをより大きな現実の象徴へと変えている。パンを握りしめた少女の、まっすぐでありながら傷つきやすさを帯びた眼差しは、苦境を耐える力、貧しさ、尊厳、そして希望を私たちに語りかける。そこでは、周縁化された生の複雑さが、ひとつの身振りのうちに凝縮されている。モノクロの写真は、シチリアを語り、内容に重きを置くイメージを通して、女性や少女たちに声を与える。彼女の写真は詩的であると同時に政治的でもあり、単なる事件報道を超えて、葛藤するアイデンティティや忘れられた場所をめぐる、より広い語りのなかに組み込まれる。そしてそこから、脆く、危うい人間と社会のエコシステムが露わになる。(TR)



《キツネとオオカミ 主導権をめぐる争い》2014年
フルHDビデオ(7分58秒)、パフォーマンス時の写真6枚とマスク
38×46.5 cm(各写真)
Foto © Modestas Endriuška
協力:作家
ファルネジーナコレクション

エレナ・ベッラントーニ

ビジュアル・アーティストであるエレナ・ベッラントーニ(1975-)は、身体、言語、権力関係が交差する点に鋭いまなざしを向け、象徴性を脱構築するための手段としてパフォーマンスやビデオを頻繁に用いた制作を行っている。彼女はビデオ作品がファルネジーナコレクションに加えられた最初の作家であり、本作《キツネとオオカミ 主導権をめぐる争い》では、全ての撮影がファルネジーナ宮内で行われた。

この作品は、象徴性に富む重層的な物語を通じて、闘争という主題を扱ったものである。主人公として登場するのは狐と狼で、狡猾さと力を象徴的に担うこの二匹の獣は、権力と誘惑の駆け引きのなかで互いに挑み合い、性別の二元論や自然と文化の緊張関係を具現化している。男性と女性というふたつの種の間に生じる力学は、ここでは擬人化された二匹の動物によって示されており、彼らは一種の求愛儀礼のように

優れた誘惑の力をここぞとばかりに見せつける。儀礼はこの場合、タンゴのコレオグラフィーというかたちで例示される。一般的に、タンゴは男性がリードする舞踊だが、ここでは対照的に女性が主導権を握ることで、ルールが転覆し、両者の役割を再定義している。英語によるナレーションは、支配的な言語規範の押し付けを語り、グローバルな状況に広くみられる文化・コミュニケーションの支配権についてのより広い省察を促す。ファルネジーナコレクションが所蔵するこのビデオ作品の傍らには、パフォーマンスでタンゴの踊り手が身に着けていたキツネとオオカミのマスクが、今回はじめて一緒に展示されている。ビデオ作品のなかで示される力のせめぎ合いに加え、展示されたふたつのマスクもまた権力の駆け引きにおいて対峙し合い、性の二元論と自然と文化の緊張関係を具現化している。(MS)

トマーズ・ビンガ

トマーズ・ビンガ(1931-)は、ピアンカ・ブッチャレッリ・メンナの偽名であり、1970年代にアートの組織体制から女性が排除されていたことを告発するための挑発的かつ皮肉めいたアルターエゴ(もうひとりの自分)として生まれた。60年代末から続けられている彼女の試みは、支配的な言語活動にたいする批判的かつ反修辞的な考察のなかで、書くことと身振り、あるいは言葉と身体とを結びつけている。1977年、ローマのギャラリー・カンボ・Dで男性の名前を使用したことは、芸術の家父長的な仕組みに抵抗するための象徴的な行為として印象ぶかい。ビンガの作品は、アイロニーを転覆の手段にすることで、文化の画一化に対抗している。《アルファシンボル》という作品において、文字や図式はキネティック・アートやオブ・アートを想起させるような光学・視覚的な平面を生み出すと同時に、言葉をイメージや身体や身振りに変化させることで、書くことがもつ論理を攪乱している。このように、彼女の視覚的なアルファベットはひとつの政治的行為になる。それは言語的、美学的、社会的な慣習に反発し、言葉や女性の身体にたいして自由と自己決定の空間を回復させるのである。

本展を締めくくるのは、未発表の4篇をふくむ、このアーティストの詩が織りなす星座であり、それは会場入り口のガラスに散りばめられて、ひとつの詩的宇宙を構成している。言葉、リズム、イメージは、意味がもつ複数性のなかで互いに絡まりあう。これらの詩は東京の展示に向けて特別に選ばれており、日本における「俳句」の伝統との対話を試みている。それらの詩がもつ言語活動の本質は、少ない詩節のなかにイメージや思考を切りつめる能力であり、空白や休止、そして言葉が喚起する力への注目である。きわめて独創的で実験的な詩的地平に属しながらも、ビンガの詩は多様な解釈の可能性を開くことができる短詩という形式を日本の文化と分かちあっている。

《女性は何存在する》はおそらく、このセクションのなかで最も政治的なテキストだろう。それは、生物学、文法、アイデンティティのあいだで言語によるショットを引き起こし、言語活動が中立であるという前提を解体している。俳句と同じように、それぞれの言葉は表意文字のような重みをもつ。すなわち、それらの言葉は描写するのではなく、意味の転換をもたらすのである。《乱れた精神》(未発表作品)においても、アーティストは感覚的なイメージを手段にしているが、そこで見いだされるのは抽象的な概念ではなく、物理的な知覚である。ここでは「触覚的」という形容詞がとりわけ重要になってくる。記憶は観察されるものとして見られるのではなく、触れられるものとして見られるのである。《なぜA=Bなのか》という作品では、言語活動が視覚的な物質となり、それぞれの記号は意味よりもまえに身体的でリズムを伴うような空間的性質を獲得する。《古い》(未発表作品)では、時間の流れに大きな注意が捧げられている。日本文化に最も近いものだ。そこででは、滅びてしまうことを運命づけられた事物がもつ儚さ(無常)や軽い哀愁が、ほとんど観想に近いような繊細さをもって観察されている。《もし、そのヒナが》という作品は一見するとふざけているように思えるが、それは実際のところ、書かれた言葉をとおして意味を構築することにたいする反省にほかならない。そこでは、視覚的なリズム、図式の解体、そして音が慣習的な言語活動を批判するための道具になっているのだ。《貝殻だけじゃ、もう足りない》(未発表作品)において、ビンガは貝殻のイメージから出発しており、それは神話の終焉をめぐる考察の中心になっている。ヴィーナスの美という理想は、西洋文化によって構築されてきたが、現代の変化に直面してその完全なる不十分さを露わにしている。灰は不可避免的に死を連想させるものだが、しかし同時に物質の変化もまた連想させる。この詩はそのように、とりわけ意義ぶかい価値を帯びており、地中海と日本とのあいだ、西洋の神話と絶えざる変化にもとづく自然および時間概念とのあいだを架橋しているのである。(ES)



《アルファシンボル》2021年

デジタル印刷

100×100 cm

Foto © Giorgio Benini

協力:トマーズ・ビンガ・アーカイブ

ファルネージナコレクション

《乱れた精神》1982年

《女性は何存在する》1984年

《古い》1984年

《なぜA=Bなのか》1990年

《もし、そのヒナが》2001年

《貝殻だけじゃ、もう足りない》2002年

壁にテキスト、音声

サイト・スペシフィック

協力:作家、トマーズ・ビンガ・アーカイブ

シルヴィア・カンボレージ

シルヴィア・カンボレージ(1973-)は写真家であり、その仕事は当初、神話、文学、現実の生活から着想を得ていたが、のちにイタリアの風景へと焦点を移していった。哲学を学んだ経験は、彼女の写真を単なる記録ではなく、対象や理念の背後に隠されたものを明らかにする解釈として成立させることに寄与している。2011年、カンボレージは主に風景をめぐる探究に取り組むようになる。《三つの教会(水が始まるとき, #2, #3, #7)》において、作家はヴェネツィアを「幽霊」のような都市として捉え、低い視点を通して、前景に広がる渦の水を際立たせている。それは冠水(アクア・アルタ)現象を想起させる。この三幅対において、ヴェネツィアは独自の文化的・歴史的身份の象徴として現れると同時に、都市を消滅させる危険をはらむ環境的脅威の象徴としても現れている。さらに作家は、幽霊のような場所や放棄された空間に捧げられた写真シリーズ《イタリア図譜 (Atlas Italiae)》を発表している。このプロジェクトにおいて、放棄はこれまでにない意味を帯びる。近代の廃墟は公共の視線から遠ざけられ、朽ちるがままにされている。現代の人間が、自らの死すべき運命と向き合うことを恐れているからである。廃墟において、形態は絶えず変化にさらされている。その境界は、これらの場所を動的な空間へ、生成へと開かれた空間へと変えていく力の持続的な作用を通じて、時間のなかで定義され直される。カンボレージは写真に手彩色を施し、自らの記憶のなかでなお鮮やかに残る色彩をそこに取り戻す。色褪せ、固有のアイデンティティを失った場所は、ゆっくりとした丁寧な身振りによって、こうして再び息を吹き込まれるのだ。(TR)



《イタリア図譜 (Atlas Italiae)》2013/2015年
ディポンド・プリント、展示用複製 / 9点組
展示空間によりサイズ可変
サイト・スペシフィック
© シルヴィア・カンボレージ

《三つの教会(水が始まるとき, #2, #3, #7)》2011年
インクジェットプリント
3点組
各63×73 cm
© シルヴィア・カンボレージ
協力: 作家
ファルネジーナコレクション

ジェア・カゾラーロ

ジェア・カゾラーロ(1965-)は、主にビデオや写真を用いることで、イメージの新たな読解可能性を高め、習慣やクリシェによって消去され、隠され、忘却されがちな現実の諸内容を浮かび上がらせている。《我々の未来について #5》は、中国とアルゼンチンという、一見すると、地理的、政治的、社会的にも対極に位置する2つの現実社会を撮影した40点の写真シリーズで構成された作品のひとつであり、資本主義社会の矛盾や現代社会が向かいつつあるように見える方向性を可視化している。カゾラーロは、こうした社会学的なアプローチを採り入れることで、道端の労働や女性の置かれた状態、道路交通網、都市化のようなテーマに取り組んでおり、現代社会をめぐる数多くの矛盾を明らかにしている。作品のタイトルは、貧困にあえぐアルゼンチンのある都市で撮影された壁のメッセージ「政府も企業家も警察も、私たちの未来を踏みしめることはできない」に由来する。同じシリーズであるビデオ作品は、ひと続きになるように合成された連続写真で作られており、エドワード・マイブリッジの動く写真研究から着想を得たものとなっている。そして、運動をめぐる二重の概念を考えるよう促している。すなわち、世界が向かっている方向性について問い直すためのメタファーとしての運動と、グローバル化や新自由主義に対する反乱への呼びかけという抗議のかたちとしての運動である。(TT)



《我々の未来について #5》2005年

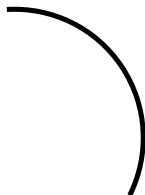
アルミニウム/パネルに貼付された写真プリント

60×80 cm

© ジェア・カゾラーロ

協力:作家

ファルネジーナコレクション



《我々の未来について》2005年

ビデオ (7分36秒)

協力:作家

マリアグラツィア・ポントルノ

マリアグラツィア・ポントルノ(1978-)は、記憶、歴史、科学、デジタル技術を絡み合わせる探究を展開し、自然、知識、イメージの構築のあいだの関係を考察している。ビデオ、3Dアニメーション、インスタレーション、没入型環境を通じて、彼女の実践はアナログ文化とデジタル文化を結びつけ、変容のプロセスがもつ詩的かつ象徴的な次元を浮かび上がらせる。《天空のレバノン杉》(2014)は、世界最古の大学付属植物園の一つであるビサ植物園に捧げられた作品群に属している。この作品は、実際に起きた出来事を出発点としている。1935年、大学の研究者たちがその下に集うのを常としていた堂々たるレバノン杉が、激しい嵐によって倒されたのである。この出来事をもとに、ポントルノは歴史資料と想像力のあいだに浮遊する物語を構築し、レバノン杉を、デジタル技術を通じて生き続ける象徴的な存在へと変容させる。この作品は、エコシステムの脆弱さと自然の力の予測不可能性について考察し、自然を安定したもの、人間によって完全に制御できるものとみなす考え方を問いに付している。持続と知の象徴であるレバノン杉は、絶えず変容にさらされる均衡の象徴となる。それは、変化が生命システムに内在する条件であること、そして今日、環境危機と気候危機を前にして、そのことがいっそう明白になっていることを思い起こさせる。

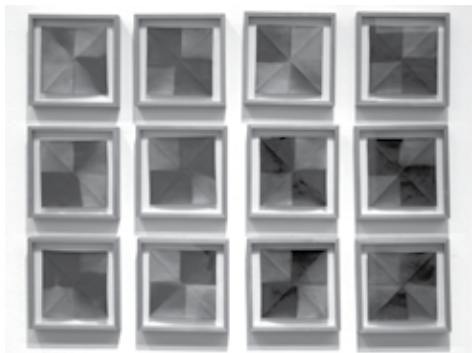
この作品は、自然を予測不可能で、科学的知識によって完全には統御できない力として示している。根と空は、作家の詩学に繰り返し現れる要素であり、記憶と変容、歴史に属するものと想像力のなかで再生され続けるものとの関係をめぐるメタファーとなっている。技術的な精密さと幻視的な次元を融合させる表現を通じて、《天空のレバノン杉》は、自然遺産の脆弱さと、イメージが過去を保存し、再発明する能力について考察している。(TR)



《天空のレバノン杉》2014年
3Dアニメーションビデオ
協力：作家、パッサッジ・ギャラリー
ファルネジーナコレクション

マルティーナ・デッラ・ヴァッレ

マルティーナ・デッラ・ヴァッレ(1981-)による芸術の探究は、アナログな手法とデジタルメディアを組み合わせたものである。彼女の仕事は、アーカイブの調査と参加型の手法をとおりて展開されながら、サイト・スペシフィックなインスタレーション、オブジェ、印刷物を生みだしている。《尾道の太陽の下で》(2009-2011)という作品は、尾道に滞在していたときに展開されたプロジェクトであり、近隣の広島に関連した出来事によって特徴づけられる。こうした背景のなかで、アーティストは太陽光が地域に及ぼす影響を考察してきた。この作品を制作するにあたり重要なのは、光と都市と場所の歴史のあいだにある深い結びつきであった。写真(2011)に写しだされた折り紙の師匠との出会い、そして破壊と再構築として理解された彼女の仕事にたいする評価は、プロジェクトを発足するための重要な一歩を刻みつけ、変化や脆さ、身振りをつづいた再生の可能性にたいする力強いメタファーを提供している。この作品において、光は二重の価値を帯びる。すなわち、それは破壊のシンボルであると同時に、再生のシンボルでもあるのだ。ファルネジーナコレクションに収蔵された12点の設計図は、生成しつづけるプロセスの痕跡を記録し、作品の中心となる光の要素を結晶化させている。こうして折り紙は、生命がもつサイクルのメタファーになる。それは解体と再生との永遠の繰り返しなのである。(ES)



《尾道の太陽の下で》2009年
折り紙による12点の設計図
各12×12 cm
© マルティーナ・デッラ・ヴァッレ
協力:作家
ファルネジーナコレクション



《尾道の太陽の下で》2011年
ビデオ(3分15秒)
協力:作家

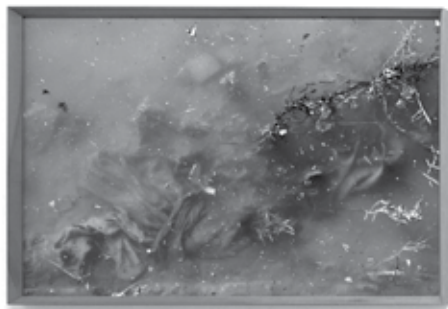


《尾道の太陽の下で》2011年
アルミニウム写真
66×100 cm
© マルティーナ・デッラ・ヴァッレ
協力:作家
ファルネジーナコレクション

イジーニオ・デ・ルーカ

社会批判と公共空間の境界領域に位置づけられるイジーニオ・デ・ルーカ(1966-)の芸術的探究は、環境危機の問題を、現代社会の価値体系に内在する最も深刻な不和の兆しとして取り上げる。彼はアイロニーや市民の関与、公共空間における直接介入を組み合わせた表現を通じて、現実の観察と消費の様態について問うが、そのために、写真やビデオ、都市でのアクションを現代社会の矛盾を可視化する批判的手段として用いる。

《テヴェレ博覧会》(2021)は、デ・ルーカの詩学の特徴をよくあらわすプロジェクトであり、一連の15のイメージから構成されたものである。そのうちの2つが近年、ファルネジーナコレクションに加わった。本作は、テヴェレ川の隠された魂を浮かび上がらせ、その川を、損なわれた生態系のメタファーと、自らの責任を顧みない共同体の姿のメタファーに変容させている。作品に写し出されるがらくたやゴミは、氷山のように、わずかに水の中から部分的に現れている。すなわち、表面に浮かび上がるものは、放置や無関心、そして日常的な否認から成る、より大きな水面下のものを想起させる。こうした見えるものと見えないもの、あるいは中心と周縁、自然物と人工物のあわいにおいて、本作はエコロジックで集団的なアイデンティティをめぐる諸境界自体を問いただし、それらが抱える深刻な不安定さを明らかにしている。後にデ・ルーカは、ローマの街において、大型の屋外ポスターとしてこれらの写真を公共空間に持ち込んだ。これにより、プロジェクトは、「不要なものを後援する」という逆説的な広告キャンペーンのかたちをとって、人間と環境の関係性のあいだに溜まった無頓着さの論理を明るみに出している。(TT)



《テヴェレ博覧会》2021年

ディポンドに貼付けられたハーネミュレ紙に

ファインアートプリント／2枚組

100×70 cm

協力：作家

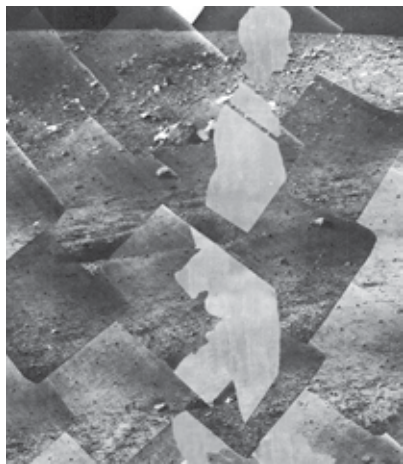
ファルネジーナコレクション

ロレダーナ・ディ・リッロ

ロレダーナ・ディ・リッロ(1978-)は、様々な表現媒体を用い、インスタレーションから写真にいたるまで、普遍的なものと私的な領域との関係をめぐる考察を展開している。そして、自身の制作活動のなかで、歴史と記憶という繰り返されるふたつの大きなテーマを結びつけている。彼女の芸術的实践では、これらふたつの主題は、絶えず交錯している。それらは、直線的な物語ではなく、喪失や抑圧、幼年期の経験が横切る情動的で断片的な領野として捉えられている。彼女の制作では、記憶や日用品、私的な感情が、情動性や象徴性をそなえた強いインパクトによって、視覚的なイメージや身振りとして再構成される。作品の中で繰り返し用いられるコラージュという技法は、時間的、視覚的、概念的な複数の層を重ね合わせることを可能にしており、重層性と非連続性を糧とする批判的思考を回復している。台所用ナイフを握る自身の腕を写した本作は、支配の手段ともなりうる芸術の役割を問い直す挑発的なイメージとして提示されている。暴君を意味するTyrantの頭文字であるTは、アイデンティティを無にし、画一的であることを強要する独裁制という権力のあり方を喚起する。つまり、本作は、西洋に内在する排除の力学と、解放の手段である一方で支配の手段にもなりうる芸術の両義性について表しているのである。(TT)



《手紙T(暴君)》2013年
アルミニウムにCプリント
89.5×71.2 cm
© ロレダーナ・ディ・リッロ
協力:作家
ファルネジーナコレクション



《月に降り立った者たち #19》2021年
金箔、ピグメントプリント
134×118 cm
© レ・ディ・マルティノー
協力:作家
ファルネジーナコレクション

レ・ディ・マルティノー

レ・ディ・マルティノー(1975-)の芸術実践は、時間の流れや、叙事詩的な物語と日常的な経験とのずれをめぐる考察であり、バトスと感情的な距離のあいだをたえず行き来している。《月に降り立った者たち #19》は、2020年に始まったシリーズの一作である。このシリーズでは、日常的で家庭的な身振りのなかで捉えられた金色の人物像が、モノクロの月面風景を背景に浮かび上がる。こうして作家は、地上の生活と異星的な情景を対話させ、視覚的かつ概念的な短絡を生み出すことで、時間と物語を宙吊りにする。この作品は、日常性と異質なもののとのあいだを揺れ動く集合的なイメージのなかに位置づけられ、ありふれたものの逆説を浮かび上がらせている。モノクロの背景と金の輝きの対比は、場面に異化的なオーラを与える。金は、象徴的な宇宙服のように、保護であり距離化であると同時に、不安定な現在における詩的な抵抗にもなっている。この静かで動かない月面風景のなかで、人間の姿は、自らの脆くも持続する存在をあらためて主張する。そして、現代世界の複雑さと不安にはっきりと対立するものとして、単純さ、静けさ、手の届きやすさへの集合的な欲望を表している。(TR)

パオラ・ガンドルフィ

パオラ・ガンドルフィ(1949-)は、女性像やそのアイデンティティを規定する心身の動きをめぐる芸術的探究に取り組む作家である。ガンドルフィは精神分析やフェミニズム研究から着想を得て、女性の無意識といった外部からは到達し難い内なる領域を掘り下げる。さらに、さまざまな技術や表現方法を使い、女性の身体、都市の地図、二重肖像をかたちにする。ファルネジーナコレクションにさまざまな作品が所蔵されるガンドルフィであるが、今回展示するのはコレクションに含まれない一連の写真作品である。イタリア文化会館の空間から着想を得たこの作品は、映像作品《時間のなかの一時的な変更》から抜き取られたものである。これらのイメージに現れる女性像は、人生のある特定の時期、つまり幼少期の作家自身にほかならない。写真と映像を織り交ぜながら、ガンドルフィは時間とともに変容するアイデンティティをめぐる重層的な物語を構築する。そこでは、身体は記憶、

社会的な期待、そして自らを更新する可能性を蓄積したアーカイブして表現される。展示されているのは、映画素材から抜き取ったシーケンスをもとに制作された紙作品である。ある素材からほかの素材へと移し変えることで、作品内にすでに含まれている変化の感覚を増幅させる視覚的な翻訳形式を導入したものである。

制作において、ガンドルフィは画像と映画の素材に直接的に働きかけ、フィルムやフレーム、視覚的に示される物語の時間に手作業で操作を加える。この物質に働きかける身振り、それもほとんど職人的な手つきによって、イメージの変容と書き換えの過程が浮き彫りになり、映像を記憶、身振り、物語が重なり合うひとつの空間へと変容させる。作品はこうしてアイデンティティと視覚言語が絶えず再定義される移行と変容の場となるのである。(MS)



《時間のなかの一時的な変更》2016-2026年

写真印画紙にアクリル絵具および墨による加筆
39×51.5 cm (各写真)

協力:作家

シルヴィア・ジャンブローネ

多様な言語活動（パフォーマンス、インスタレーション、彫刻、音、ビデオ）をとおして、シルヴィア・ジャンブローネ（1981-）の仕事は身体をめぐる政治や実践を探りだし、とりわけ隷従の最も隠された形式に注意を向けている。その作品でなされている試みは親密さの政治的次元を探究するものだが、親密さは個人のうちにあって最も深く神秘的な力に根ざした領域とみなされている。一見すると安全に見える家庭内の空間は、暴力を学習し、内面化するための背景に変化してしまう。《鏡 No. 34》は、厚く塗られたロウや樹脂に覆われた鏡であり、そこからはアカシアのトゲが突き出ている。その表面は、見た目としては脆くも思えるが、同時に威嚇めいてもいて、自分自身を映しだすという快楽を否定している。そうした快楽に代わって、苦しみや傷つきやすさへの反省を強いるようなイメージを提示するのである。本作は、アイデンティティや知覚、さらには自我と外界との対立に結びついたテーマに向き合い、自然と文化と個人的な次元とのあいだに対話を生みだしている。（ES）



《鏡 No. 34》2023年

ブロンズ、樹脂、ロウ、アカシアのトゲ

90×52 cm

Foto © Giorgio Benni

協力: 作家、リチャード・ソルトーン・ギャラリー
ファルネジナコレクション

マリア・ライ



《石の糸》1997年

糸、テンペラ／布

24×38×4.5cm

Foto © Paola Farfaglio

協力: © Archivio Maria Lai by SIAE

ファルネジーナコレクション

マリア・ライ(1919-2013)は、20世紀のイタリア芸術における最も重要なアーティストのひとりである。彼女はテキストを詩的かつ象徴的に使うことで知られている。ライの芸術実践は生まれ故郷であるサルデーニャ島の伝統に根ざしており、そこから彼女は糸や布、機械機やパンのように物質的なものだけではなく、さらには集合的記憶や神話や儀式そして民衆の知恵にむすびついた精神的内容にたいするインスピレーションを引きだしてくる。縫うための糸や身振りをとおして、ライは伝統的に女性がおこなってきた家庭内の実践を芸術の言語活動に昇華し、そうした家庭内の実践を解放や記憶や抵抗の道具に変化させて、しばしば周縁に置かれがちであった知恵への尊厳を回復しようとした。彼女の仕事は聖なるものの次元や民間伝承に深く根ざしており、アイデンティティや帰属、記憶、関係といったテーマにかんする熱心な考察を深めている。《石の糸》という作品では、絡まりあった糸が様々な繋がりがりや関係、さらには共有された記憶のメタファーとなっており、これはライの「存在することは織りなすことである」というモットーと深く共鳴している。そこで糸は、普遍的かつ象徴的な価値を帯び、女性がおこなってきた伝統のための道具から、意味を物語ったり、接続したり、構築したりするための媒体に変化しているのである。(ES)

ケッティ・ラ・ロッカ

ケッティ・ラ・ロッカ(1938-1976)は、20世紀後半のイタリアのアートシーンにおいて、もっとも重要かつ革新的な芸術家のひとりとして評価されている。彼女は、1970年代における女性をめぐる状況に着目し、コミュニケーションの表現手法に内在する権力のメカニズムを鋭い批判精神をもって問い直している。彼女の実践を特徴づけるのは、政治・社会的なテーマに対する徹底した関心であり、特にジェンダーをめぐる固定観念や女性のイメージに焦点をあてている。コラージュ作品である《この標章は憂鬱を意味する》は、文字、視覚、記号からなる言語が、現実世界の知覚やアイデンティティの確立に深く影響を及ぼしうる文化的構築物であるということを明らかにしている。ここでは、テキストや標章、グラフィックが用いられているが、それらは集団的思考を形成し規定するコミュニケーション体系の権力を想起させる。本作品では、そのようなコード化された秩序が、個人の表現の自由と対置されているのである。(TT)



《この標章は憂鬱を意味する》1970年

コラージュ／紙

63×83 cm

Foto © Paola Farfaglio

協力: ケッティ・ラ・ロッカ・アーカイブ、ミケランジェロ・ヴァスタ

ファルネジーナコレクション

エレナ・マッツツイ

人類学の研究方法に根ざした芸術実践をとおして、エレナ・マッツツイ(1984-)は現代社会の様々な争点に向き合っている。このアーティストはしばしば、みずからの研究課題に直接的に関係しているコミュニティとともに活動するが、それは協働的な実践や思弁的な思考といった多様な学問分野の手法を発展させるためである。《クジラのリュックを背負った自画像》のなかで、マッツツイは「クジラーリュック」を背負った自らを示し、自然が人間にもたらす象徴的な重荷や、人間が自然の世界にたいして負わなければならない責任を喚起している。この作品はアイスランドに旅行している最中に起きた事故から生まれているのだが、そこでアーティストはいくつかの脊椎を骨折してしまったという。そうした経験や、庭を飾るためにクジラの骨を集めるといったアイスランド地域の実践を観察することによって、マッツツイは個人的な記憶や風景、神話を織り交ぜた自画像を形成してゆくのである。この写真では、手術の痕がアーティストの身体にまだ残っているのが見える。彼女は自らが歩んできた道のりの具体的かつ詩的な象徴として、クジラの大きな脊椎を背負っているのである。この作品は、人間と自然のあいだ、トラウマと再生と変化のあいだにある関係を感じ覚的に示す見取り図として現れているのだ。(ES)



《邂逅》2021年

HDビデオ (5分29秒)

協力: 作家、エクス・エレットロフォニカ・ギャラリー



《クジラのリュックを背負った自画像》2018年

ファインアート写真

66×100 cm

© エレナ・マッツツイ

協力: 作家、エクス・エレットロフォニカ・ギャラリー
ファルネージナコレクション

エリーザ・モンテッソーリ

エリーザ・モンテッソーリ(1931-)は1950年代より活動を続ける作家であり、技術面や様式面での幅広い実験をつうじて制作を展開してきた。彼女は作家人生のなかでいかなる分類形式も退け、抽象と具象の明確な区別をせずに、開かれて流動的な芸術の見方に身を委ねる。その芸術言語は、絶えず変化しつつ、東洋からの影響や、痕跡への特別な関心、そして芸術と文学とのあいだで続く対話を取り込むものである。《素描》は、無駄を省いた線と色彩で塗りつぶされた背景によって生じるリズムをとおして展開され、この線と色彩は絶え間なく変容し続ける宇宙を想起させる。その制作の中心には、女性と自然の関係性があるが、これは変容の動的なプロセスとして理解される。またそこでは、アイデンティティや記憶や風景が視覚的な流れにおいて絡み合う。構成は、一見したところ偶発的に成立したように見えるが、それは記号や色彩、象徴的な断片をつうじて、連想と解釈の絶え間ない過程を生み出す洗練された造形構成によるものである。東京での展示に際して、3点のレボレッコ(冊子)と2点のアーティスト・ブックが選ばれたが、これらの形式自体が作品を創造する過程における構成要素となっている。じゃばら状に折り畳まれた紙は、まさに途切れることのない流れのように、明確に決められた始まりも終わりもないまイメージが拡張することを可能にしており、作家の制作全体を貫く変容や変化の原理を可視化している。日本の伝統的な折り本にも通じるこの形式は、空間と時間のなかに徐々に広がっていくような読体験へと観る者を誘い、今回の展示を受け入れる日本の文化的文脈との直接的な対話を成立させる。(MS)



《素描》2003年

インク／紙、画布

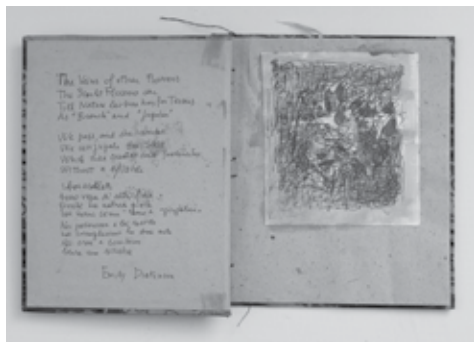
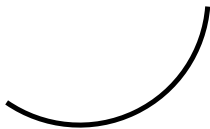
225×165 cm

Foto © Modestas Endriuška

個人蔵

協力:作家

ファルネジーナコレクション



《エミリー・ディキンソン》2017年

アーティスト・ブック／水彩絵具、墨／紙

30×19 cm

協力:作家、モニター・ギャラリー(ローマ、リスボン、パレート)

《無題》2019年

レボレッコ／水彩絵具、墨／紙

17×12×252 cm

協力:作家、モニター・ギャラリー(ローマ、リスボン、パレート)

《3つの冊子 無題》2026年

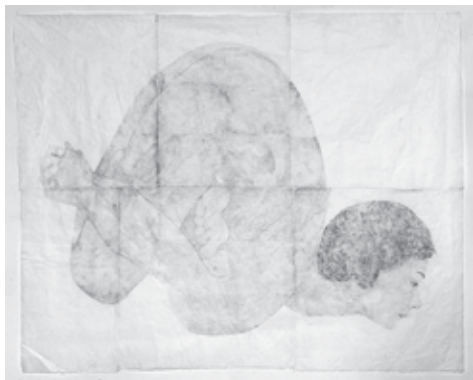
レボレッコ／水彩絵具、墨／紙

17×12×252 cm

協力:作家、モニター・ギャラリー(ローマ、リスボン、パレート)

マルタ・ロベルティ

線描画はマルタ・ロベルティ(1977-)の芸術実践の中核をなし、インスタレーションやアニメーションにも活用される。作家はこれらの表現方法をとおして東洋と西洋の関係性を探り、古代の神話や物語を研究しつつ、視覚的な表現を手がかりに再構築している。彼女の試みは、「わたし」が明確な輪郭を持たず、また必ずしも人間とは限らないという考えに基づいており、流動的で多様な要素が混ざり合ったものとしてのアイデンティティ観を中心に据えている。彼女の人物像は、人間とも動物とも言いがたく、種を越えて所属しているような感覚を呼び起こす。また、広がりをもつアイデンティティの可能性をめぐる作家の思索がかたちを結んだ像であり、あらゆる固定化された存在の定義に問いを投げかけている。ロベルティは作品において、ナメクジの姿態をまねたような裸婦像を描くが、その姿は防御と傷つきやすさの身振り、あるいは抵抗と変身の身振りも想起させる。その体勢は、人間の身体というにはわざとらしく不自然で、物理的に無理があるが、これは脅威をまえにした動物がとる防御の体勢を作家が丹念に研究した結果生み出された造形である。線描画はこうして身体や種やアイデンティティの枠組みの可能性を探るための手段となる。自画像が他者の(有鱗動物であるセンザンコウのような)身体のかたちをとるのはこうした意味においてである。それは危機や、さらには人間と非人間のあたらしい同盟関係の可能性を具現化したかたちである。(MS)



《ドレッドヘアのカタツムリとしての自画像》2020年

オイルパステルとグラファイト/手漉き紙

137×188 cm

© マルタ・ロベルティ

協力: 作家

ファルネージナコレクション

マリネッタ・セナトーレ

マリネッタ・セナトーレ(1977-)は、学際的な作家であり、その実践は方法と内容において、強い参加型の性格を特徴としている。彼女の作品は、共同的・共有的なプロセスから生まれる。その美学的実践は、社会の取り決めと絡み合っており、共同体や記憶、変容の役割をめぐる考察を活性化することのできる視覚的な装置にかたちを与えている。多様な集団とのワークショップやラボ、共同制作を通じて、セナトーレは、地域に根ざした経験とグローバルな力学との関係を明らかにするプロジェクトを立ち上げ、社会・政治的な参加の意味を、とりわけアイデンティティの危機によって意味付けられる文脈のなかで問いただす。彼女の作品は、集合的な物語が繰り返られ、能動的な主体性の新たなかたちが主張される象徴的な空間となっている。展示作品《抵抗のかたち 記憶と顕彰》は、刺繍を施された一枚の旗であり、地元の職人やコミュニティとの協働によって制作されたものである。彼女が作り上げたこれらの視覚的オブジェクトは、宗教的な行列や労働組合の旗を思わせるが、ここではその機能を転倒させている。実際、刺繍は装飾的なものではなく、集いや交流の中から生まれたモットーや歌、詩、そして社会的な告発のメッセージを表している。このようにして、セナトーレは集団の声を再び中心に据え、芸術をアイデンティティ構成の手段であると同時に解放へ向かう原動力として位置づけている。(TT)



《抵抗のかたち 記憶と顕彰》2019年

舞台用ベルベットに刺繍

206×90 cm

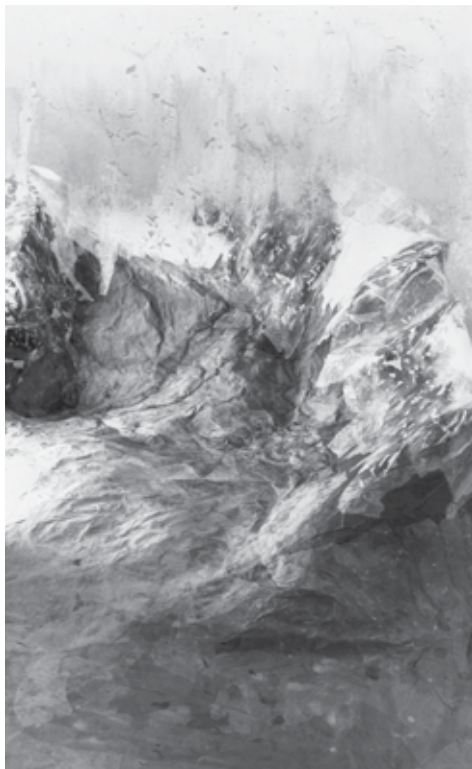
Foto © Sebastiano Pellion di Persano

協力: 作家、マッツォレーニ (ロンドン、トリノ)

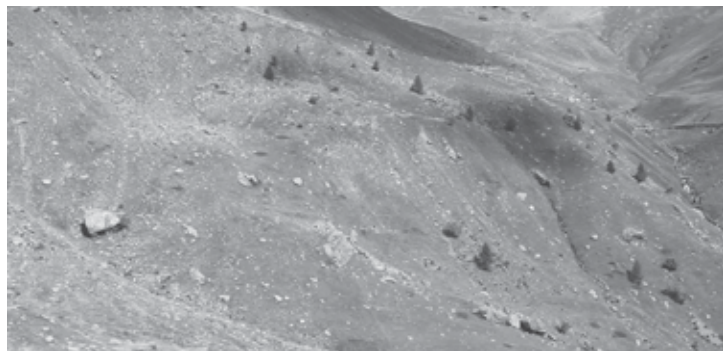
ファルネージナコレクション

ラウラ・プーニョ

ラウラ・プーニョ(1975-)は、ピエツラ・アルプスの山岳地域に生まれた。彼女は、山岳風景との深いつながりを起点として自らの芸術的リサーチを展開しており、その風景は当初から、彼女にとって特権的な探究の場であった。この環境への親しみは、生来の好奇心と発見への強い衝動と結びつき、20年以上にわたって、認識と関係の空間としての風景—象徴的に「落ち着く」ことのできる場—をめぐる彼女の研究を導いてきた。今日、環境危機が私たちの生活に広がるなかで、プーニョは、この状況の複雑さを芸術を通して表現することが急を要するものであると感じている。《アクティング・アウト》では、風景写真が人工的なセットの内部で構成され、その後、イメージの一部を消し去る筆致によって再加工される。それは、本質的なものを明らかにしようとする逆説的な身振りである。この削ぎ落としの行為は、視覚的なヒエラルキーを再定義し、現実をより意識的な仕方で編成し直すための手段となる。彼女の風景は、物質的な質感を保ちながらも、見る者を安心させるヴィジョンとして現れるのではない。それはむしろ、とらえがたい空間として立ち現れ、出来合いのカテゴリーに従って世界を見る私たちの習慣を揺さぶるのである。(TR)



《アクティング・アウト》2014年
デジタルプリントに擦過加工
84 × 64 cm
© ラウラ・プーニョ
協力:作家、シモンディ・ギャラリー
ファルネジーナコレクション



《防衛機制》2012年
HDビデオ、カラー、サウンド(4分44秒)
協力:作家、シモンディ・ギャラリー

アニーゼ・プルガトーリオ

アニーゼ・プルガトーリオ (1964-) はバーリに生まれ、以前から自身を「東洋と西洋のあいだにある」存在と位置づけてきた。この位置取りは、彼女の探究の核心を映し出している。移住、ノマディズム、マイノリティの権利といった主題は、彼女の芸術実践の中心にある。その実践は写真を起点として展開され、コラージュ、ビデオ、インスタレーション、パフォーマンスといった表現形式へと広がっている。彼女の作品は、詩的かつ政治的な眼差しによって、記憶と集団的な経験をめぐる絶え間ない探究を映し出している。《あなたは私に手紙を書いてくれるかもしれない (Perhaps You Can Write to Me)》において、プルガトーリオは演劇的かつパフォーマンス的な写真を用い、生を実存的なノマディズムとして表現している。さらにモノクロームによって、時間を超えた感覚や宙吊りの感覚を強調している。同じ題名をもつビデオ作品では、作家はオデュッセウスのように手漕ぎ船の帆柱に縛りつけられ、目隠しをされたまま、仲間たちに導かれてシチリアの海岸沿いを進んでいく。その場所は、スキュラとカリュプティスの海峡に近い。彼女の姿は殉教を思わせる。船は何度も上陸を試みるが、住民たちの敵意ある反応によって拒まれる。彼らは「この国から出ていけ」と叫ぶのだ。こうしてこのビデオは、移民の置かれた状況、そして統合と帰属への欲望が挫かれることのメタファーとなる。そこでは、非正規滞在者も作家も、受け入れられる場所を見出すことができない。オデュッセウスのように、彼らは再び出発することを余儀なくされる。それは、辿り着く港をもたない航海の旅である。同様に、《非合法状態のなかで》においても、作家はイタリアの形をした筏の上に移民たちを置き、彼らを縁に配置することで、孤独と排除の状態を強調している。彼らを導くのは、未来と変化の象徴である妊娠した女性の姿である。この作品は、移動する人間性をめぐる強烈で象徴的なイメージを提示しており、その力はモノクロームの表現的な使用によってさらに強められている。(TR)



《非合法状態のなかで》2014年
デジタル・コラージュ
79.5×113 cm
© アニーゼ・プルガトーリオ
協力: 作家
ファルネジーナコレクション



《あなたは私に手紙を書いてくれるかもしれない》2015年
デジタル・コラージュ
79.5×113 cm
© アニーゼ・プルガトーリオ
協力: 作家
ファルネジーナコレクション



《あなたは私に手紙を書いてくれるかもしれない》2009年
ビデオ・パフォーマンス (3分52秒)
協力: 作家

Colophon

イタリア共和国外務・国際協力省

On. Antonio Tajani

副首相兼外務・国際協力大臣

Mauro Battocchi

成長・輸出促進総局局長

Filippo La Rosa

成長・輸出促進総局副局長－イタリア語・文化・地域振興部長

Maria Letizia Santangelo

成長・輸出促進総局第六課（イタリア文化振興）課長

Luigi Cascone

成長・輸出促進総局第六課（イタリア文化振興）

文化振興・イタリア文化会館・ファルネジーナコレクション担当

Caterina Scarponi (*Katerina Skarponi*)

成長・輸出促進総局第六課（イタリア文化振興）

文化振興・イタリア文化会館・ファルネジーナコレクション担当

Donatella Brindisi, Michela De Riso, Domenico Laselva,

Mario Izzi, Redenta Maffettone, Guendalina Penteriani

成長・輸出促進総局第六課（イタリア文化振興）

文化振興・イタリア文化会館・ファルネジーナコレクション担当

文化推進担当官

Lorenzo Balbi, Luca Massimo Barbero, Giovanna Calvenzi, Cristiana Collu,

Fabio De Chirico, Anna Mattiolo, Federica Pirani, Ludovico Pratesi, Angela Tecce

ファルネジーナコレクション学術委員会

在京イタリア大使館

S.E. Mario Andrea Vattani

駐日イタリア大使

イタリア文化会館

Luca Marini

館長代理

イタリア現代美術展
境界を越えるアイデンティティ
人間と自然の対話
ファルネジーナコレクション

展覧会

Benedetta Carpi De Resmini
監修

Paola Farfaglio
プロジェクトマネージャー・コーディネーター

Giovanni Lorenzo Zipoli
運営・制作

Latitudo - Exhibition Services
輸送
設営

MAG JLT
保険

Valentina Stecchi
コミュニケーションマネージャー

Marcella Russo | RP Press
広報

2point3
グラフィックデザイン

翻訳	
江川 空	EGAWA, Sora (ES)
竹下 涼	TAKESHITA, Ryo (TR)
鳥山 倫史	TORIYAMA, Tomofumi (TT)
松下 栞	MATSUSHITA, Shiori (MS)

本展に貴重な作品をご出品いただきました作家の皆さまならびに所蔵者の皆さまに、心より感謝申し上げます。
Archivio Accardi Sanfilippo, Roma; Archivio Letizia Battaglia; Archivio Maria Lai; Archivio Ketty La Rocca
- Michelangelo Vasta; Fondazione Sartirana Arte, Pavia; Galleria Ex-Elettrofonica; Richard Saltoun Gallery,
Roma-London; Mazzoleni, London – Torino; Galleria Simondi, Torino

また、本展開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての皆さまに、深く感謝申し上げます。
Stefano Pasqualoni, Alessia Santacroce, Alessio Spasiano, Ionut Soldanescu

